

文化振興ビジョンを推進するための懇話会 第1回会議概要

1 日 時：平成24年7月26日（木） 15：00～17：00

2 場 所：小田原市役所 301会議室（3階）

3 出席者

(1) 委員（8名）

畠山座長、鬼木副座長、石田委員、大澤委員、神馬委員、露木委員、深野委員、間瀬委員

(2) 行政（8名）

加藤市長（公務により途中退出）、諸星文化部長、奥津文化部副部長（公務により途中退出）、瀬戸管理監、中津川文化政策課長、福井文化政策係長、田中主事

4 傍聴者 2名

5 会議の概要

(1) 会議の公開について

小田原市情報公開条例第24条に基づき、公開することとした。

(2) 市長あいさつ

【加藤市長】

- ・この場が有意義なコミュニケーションと総括の場となるよう、裾野の広い議論を期待している。
- ・文化振興ビジョンの策定は、新しい市民ホール建設の前提となる文化政策が貧困なまま現在に至っていたことから、ハード整備に加えて始まった議論である。小田原の持つ豊かな自然・歴史・文化・なりわいをより能動的に生かし、そこから新しい力を立ち上げるための文化の創造が必要であると考えている。
- ・小田原は地域資産が豊かであるがゆえに、これまで本来持っている潜在的な力を掘り起こさずにきた。まだ生かされていない力が相当あると思う。
- ・ビジョンは策定して終了するケースが多いが、市民ホール整備というハード事業を控えている小田原市としては、ハード事業だけでなく、まちなかにあふれ出すソフトの力をつけ、文化の力を育てていきたいと考えており、実際に昨年度よりも文化に関わる事業には予算を増やして取り組んでいる。ホールが完成してからではなく、現在すでに動き始めている事業の検証も含めて、懇話会ではビジョンの稼働ができていくかというチェックと取り組みに対する提言をいただきたい。

- ・芸術文化の分野だけでなく、なりわいや歴史分野、およびそれらを支える小田原の自然も視野に入れて、小田原の持つ力を十分に発揮できる方向への提言をほしい。
- ・現場を担う委員の方が多いこともあり、具体的な提案について随時意見を出してもらいたい。文化部が受け止めて事業化していくことも考えており、闊達な意見交換の場にしてもらいたい。

(3)座長及び副座長の選出について

委員の互選により、座長に畠山氏、副座長に鬼木氏を選出した。

(4)議題1「文化振興ビジョンを推進するための懇話会について」および、議題2「小田原市文化振興ビジョンについて」

このことについて、議題1、2はその経緯や意義について関連性が高いことから、合わせて議論することとし、事務局より、文化振興ビジョン（以下、ビジョン）の内容、および平成24年度はビジョンで提言されている推進体制（組織）や評価方法について検討するとともに、ビジョンを目に見える形に具体化する等の検討を行う必要があることなどを説明した。その後、以下のような意見が出された。

【鬼木副座長】

- ・ビジョン策定検討委員会では、推進体制・評価制度の議論が十分でなかったが、これらは文化政策課、さらには小田原市にも関わる問題であるため、今後ビジョンをどう実施していくかはこの懇話会の検討事項と考える。
- ・ビジョンは文化振興だけでなく、まちや人との関わりを含めた幅広いものになっているので、推進体制についても、まち・人・役所など様々な人が参加するものにしていきたい。

【神馬委員】

- ・市内の文化事業は多彩で、中には長年にわたって実施されているものもある。継続は力なりと言えるが、マンネリ化や高齢化、疲弊している事業もあり、そういった事業に対して、手助けし、もっとこうしたらいいのでは？というアドバイスなどができたらいい。

【露木委員】

- ・ビジョンの立ち上げから参加したが、初めてこのような場に参加し非常に勉強になった。文化の広さを学んだ。
- ・具体的に、地場産業に携わる者の立場から意見を述べていきたい。また、小田原ならではの文化の活性化をサポートできる体制を目指したい。
- ・地場産業は経済と思われがちだが、寄木細工は工芸品である以前に、人・もの・環境が整っており、芸術品と捉えたから発展した。
- ・2年前に箱根のラリック美術館で「箱根寄木アール・デコ展」を開催したが、晩年のアー

ル・デコの寄木細工の模様と小田原の寄木細工の模様が似ていることがわかり、非常に興味深くやらせてもらった。

- ・地場産業は潜在能力があるので、プロデュースする人がいれば、魅力発信になると思う。

【間瀬委員】

- ・条例やビジョンは過去を調査して現状分析をするものだが、未来の構築を併せて実施しなければならない。
- ・「PDCA サイクル」に例えると、ビジョンは”P(Plan)”、この懇話会で議論する推進体制は、推進とチェックということで”D(Do)、C(Check)”にあたる。
- ・自分は舞台が専門なので、委員の皆様からは多くの意見をいただき、市民のためのビジョンにしたいと考えている。

【深野委員】

- ・このビジョンは抽象度が高く、内容を具体化しないと市民ホール建設のために作られたと捉えられる恐れがある。
- ・以前、中国にいた時に日本と異なる文化を体験したが、文化の違いというものは、そこにいる人間の行動様式の違いによるものであり、なぜ行動様式に違いができるかを遡って考える必要がある。それは、歴史の勉強をもっとしなければならない、ということにつながるのではないだろうか。小田原市は歴史は古いが深く掘り下げられていないため、今後掘り下げていきたい。
- ・寄木細工の歴史を見てみても、技術や技能がなぜ生まれたのか、きっかけがあるはずである。調べてみれば地域の広がりもわかって面白いのではないか。しかし、同時に歴史は継承するだけであり、文化には未来への創造も必要である。
- ・文化は異質のものがぶつかり合って新しいものが生まれるが、新しいものが生まれる行為そのものが文化である。ビジョンをより深めるために、その切り口で考えたい。

【石田委員】

- ・このビジョンは色々なことが書かれているが、そこから色々な切り口が作れる。音楽にからめて何を考えられるかというときに、ポイントがいっぱいある。
- ・ビジョンの14ページにも書かれている「若手アーティストの活用」は、音大の重要な課題であるが、神奈川県と昭和音大とでこれについて考え、若手とベテランと一緒に鑑賞事業やアウトリーチという形で各学校やホールにオーダーメイドで届ける事業を2年間実施した。全ての演奏会が毎回違う内容で、これを通じて学生の技術が非常に伸びたり、国際音楽コンクールで一位を獲った人が参加するなど、ライブな感じだった。そういったことがキーワードとしてビジョンの中には含まれており、さらにそこから具体的なものに発展できる内容がとても多く含まれている。
- ・文化は人と人との出会いやぶつかり合いから生まれると言ったが、懇話会そのものもライブな感じで行える場にしたい。

【大澤委員】

- ・この懇話会の議論そのものに文化の切り口があらわれており、ビジョンを推進するための懇話会が開かれたことは、画期的なことである。
- ・ビジョンを具体化した内容にすると、すぐに評価にうつらなければならないが、このビジョンは理想を描くことがひとつの性格としてあり、理想を語りながら進めていっても良いのではないか。内容としては抽象度は高いが、ここから形を生み出すための原石がある。
- ・ユネスコの「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言(2001年パリ)」に、『文化とは社会或いは社会集団の精神的・物質的・知的・感情的特性の組み合わせであり、芸術・文化に加えて生活様式・共生の仕方・価値体系・伝統・信念が含まれると認識すべき』とある。自分はこの中で、“文化には共生の仕方・価値体系”が含まれるということに共感した。文化はどうしたら人々が一緒に生きられるかという時に生まれる手段である。小田原というまちで一緒に暮らしていくための共生の仕方が、文化振興が必要な理由である。
- ・誰をも排除できない、共生しなければならない時に、音楽や美術、伝統文化が必要なのではないか。そういうところからビジョンを語っていくぐらい壮大であってもよい。

【畠山委員】

- ・元イタリア大使の知り合いが、日本はものづくりと文化にもっと自信を持っていいと言っていた。小田原のもの、他の地域では食べられないものを食べるのもひとつの文化である。
- ・懇話会で目指す“評価”とは、ある文化事業を評価するのではなく、ビジョンがどれだけ進んだかなどの進捗状況を評価することである。
- ・評価基準および評価体制をどう決めるか。ビジョンの体系に書かれている“視点と課題”が評価基準に該当するのなどを議論する必要がある。

【鬼木委員】

- ・懇話会の最終的な成果物、つまり何をもって結論とするかなど、結論の再確認をしたい。ビジョンとして何をするのかではなく、懇話会では推進体制と評価方法についての具体的なプランニング設定が求められているという理解でよいか。
- ・推進体制を具体的にどのような方法で行うのか、どのような事業を実施するかということまで懇話会の検討事項に含むのか。また評価方法については、指標や評価対象、誰が評価するのかといったことが、懇話会の最終的な成果物という理解でよいか。

【事務局】

- ・成果物を冊子等でまとめることは考えていない。
- ・評価基準をどこにもっていくのかは、懇話会で出された意見をもとに行政が判断したい。ビジョンに書かれている“視点と課題”がそのまま評価の基準となるわけではないが、それをもとにどのように推進するのが良いかというひとつの基準となることもありえる。

また、懇話会の最終的な課題は成果物をまとめるのではなく、提言によりビジョンの進捗を評価することである。

- ・この懇話会は諮問機関にならないようにしたい。
- ・この場で行われる議論も成果物のひとつと考えている。

【深野委員】

- ・資料1の検討事項にアクションプランと書いてあるが、アクションプランの作成は懇話会の課題なのか。

【事務局】

- ・(アクションプランの)作成の必要性があるかどうかを議論してもらう程度でよい。

【鬼木委員】

- ・推進体制と評価方法について議論するにあたり、私がイメージする推進体制は、全国の自治体の共通の課題でもある「アーツカウンシル」である。文化は一般の行政評価と異なり、専門家と一緒に推進するとともに市民の意見を反映することが求められる分野である。
- ・推進体制や評価方法を狙いとして欧米（特にイギリス）で始まった制度を日本でも実施しているところもある。アーツカウンシル（芸術協議会）について、いくつかの具体的な事例を紹介していただきたい。私としては、アーツカウンシルについて、日本でまだやっていないことをこの懇話会でできないだろうかと考えている。
- ・現在のアーツカウンシルは一般に補助金の分配がメインだが、それだけではなく、文化振興そのものを引き受け、文化分野の課題やフォローも含めた、ゆるく、より大きな組織を作れないだろうか。
- ・ビジョン自体が広範なものを対象にしているのに合わせ、推進体制と評価方法も他都市の例にあわせるのではなく、小田原ならではのやり方でやりたい。
- ・成果物としてレポート等が必要ないということだが、この場での議論が主な成果となるような議論を目指したい。

【大澤委員】

- ・アーツカウンシルは、第2次世界大戦後にイギリスで設立、今、文化政策において話題となっている。
- ・アーツカウンシルという言葉と合わせて紹介されるキーワードに“アームスレングス”というものがある。これは、アーツカウンシルなど政府から一定の距離を置いた独立機関が、日本の文部科学省にあたる文化・メディア・スポーツ省から予算を受けてそれぞれの文化団体を援助し、それを資金として各団体が事業・調査研究・評価および、国に対するレポート提出を行うもので、一定の期間で政府とアーツカウンシルの間で協定を更新していく仕組みである。
- ・欧米にはアーツカウンシルは盛んに実施されており、近年ではシンガポールやオーストラリアでも実施されている。日本でも昨年、専門職が設置され、東京と大阪で立ち上げ

の準備をしている。

- ・今後、アーツカウンシルは様々な形で全国各地で議論になることが予想される。ひとつの理由として、文化予算が厳しい状況の中で、文化政策に予算を使うことの説明が必要であるため、専門家の知見や制度、プログラムのあり方等の検証が求められる動きがあるためである。日本のアーツカウンシルの採用の仕方で問題となっているのは、独立した決定機関を持っているとは考えにくく、政府との距離が近いことである。
- ・特に、東京都の文化政策課など、役所の中で決められたことを遂行する下請け機関化する可能性があり、都知事の顔色を伺った施策になる恐れがある。そういった意味で、ビジョンの中で書かれている「小田原文化評定」はアーツカウンシルの和訳（芸術評議会）とも合致しているのではないか。この懇話会がどれだけ自立した意思決定や評価機能を持つ組織になれるか、市民や関係者、専門家が関わり、文化が市にとってどれくらい重要かを市民や専門家が説明できるようになれば素晴らしい。

【石田委員】

- ・この懇話会は市民や専門家、職人など実際に活動している人すべてが、文化振興というものに対して同じ方向を向くことをやわらかく話し合う場でありたい。

【間瀬委員】

- ・逗子市では、4年前に文化振興条例を策定する際に、逗子アーツカウンシルを作るという提言があった。しかし、日本版アーツカウンシルはできるのかと疑問に思った。なぜならば、日本は芸術文化が行政に近いところで行われており、また欧米の文化大臣にあたる人の権限の強さは日本の現状とは大きく異なる。
- ・様々なところでアーツカウンシルという話が出ているが、文化振興基金を英訳すると“Japan Arts Council”となり、すでに日本にあるとも言える。小田原文化評定のようなまったく違う形の小田原の文化をどう発展させ、活動にどうアドバイスするかが、推進体制という言葉の中に含まれている。
- ・ビジョンが目指す評価は、“効果測定”であり、それは、歩みが遅いものにはどう働きかけ、どのような組織を作ったらスムーズに動くのかという意味ではないかと考える。具体的に事業を個別評価するのはその先のステップと考える。
- ・行政内部がまず身内から無駄を省き、事業の見直しを始めている。このビジョンを通してみた小田原の芸術活動の効果測定が必要であり、そのために様々な意見を出し合いながら、やわらかな推進体制を目指したい。

(4)議題3「小田原市の文化的要素を含む事業について」

このことについて、事務局より、小田原市および市の関係団体が実施した23年度の文化的要素を含む事業について、実施件数からみた傾向などについて説明した。

その後、以下のような意見が出された。

【大澤委員】

- ・市が関与していない事業についての調査結果はあるのか。
- ・分類は件数をベースとしているが、実施日数や参加者、予算規模などもわかるとよい。

【事務局】

- ・これまで、民間主体の事業の調査はしていないが、ビジョンの対象は市の事業だけではないので、今後は把握しなければならないと考えており、調査の必要性は感じている。そのための調査方法などもいずれ話し合っていきたい。

【畠山座長】

- ・まつりの多さは小田原の文化である。神輿の担ぎ方や掛け声も小田原流があり、ひとつの文化といえる。

【間瀬委員】

- ・小田原は3月頃から7月頃にかけて、まつりがとても多い。それが長年にわたって続いていること、また、まつり自体が小田原城や歴史にからんでいることも注目すべきこと。城下町には歴史があり、小田原は和菓子や呉服店が多い。小さいまちで、これだけの和菓子屋、呉服店が成り立っているのはすごい。小田原にいる人は身近すぎ、当たり前すぎて気がついていないが、それに気づくことも大事である。

【石田委員】

- ・担当部署別にみると、観光課が多い。文化事業に観光課が関わっており、文化的なものが、そのまま観光に直結している。
- ・資料に全てのことが書かれている。これだけの情報があれば、ここから多くのことを見出すことができるが、ひとつには、4割近くが市の事業ではないということは、市民の力が強いことがわかる。この力を市がうまく活用することが全てではないかと考える。

【畠山座長】

- ・小田原は市民の自治会組織がしっかりしている。自治会加入率も高く、団結力も強い。また公民館活動も活発である。まつりはこのような地域の団結が強いからできること。
- ・地域の結びつきの強さが小田原の文化の根源なのではないか。

【石田委員】

- ・地域のつながりがないと実施できないまつりも行われており、小田原は外側から見ると魅力的なまちである。

【露木委員】

- ・隔年で「小田原・箱根木製品フェア」を開催しているが、来年から市の援助がなくなるというひとつの画期を迎えており、新たに組合のバックアップを受けて、若手の工芸家で“雑木囃子”というグループを作って活動している。雑木囃子では、小規模だが展示会などを開催し、情報発信や技術向上の場として活動している。
- ・小規模でも続けていくことが大切なことではないかと考える。

【深野委員】

- ・(逆の意見として) 観光課の事業が多いということは、観光課ががんばらなければならぬということである。
- ・仙台の事例を挙げると、仙台は有名な観光地だが、観光客を案内するところが少ないという点で、小田原と似ている。しかし、“仙台”というブランドだけで人が集まり、商店街には若者があふれ、ブランドの店もある。仙台はそういう(人が集まるような)まちづくりを実施している一方で、小田原にはそのような雰囲気がない。都市の規模が違うし、小田原には小田原市民のこれまでの地道な活動があるが、ブランドがない分、努力をしないと人は集まらないため、市民の参加も必要である。まつりも多く、努力をしてはいるが、ブランドに結びついていないのが現状である。

【神馬委員】

- ・まつりが盛んと言われるが、意外と地元の人達は冷めており、温度差を感じる。小田原市は広いので、まちなかの人と周辺の人との想いに差があり、まつりだけが良いとは思わないかもしれない。

【大澤委員】

- ・小田原といえばこれ、という文化的要素を含む事業がないのではないかと。資料を見て事業の多さを意外と感じるということは、これだけ様々な事業を実施していることを知らないという意味でもあり、それだけ全国的に見てインパクトのあるイベントがないという見方もできる。

【石田委員】

- ・小田原は歴史や伝統もあり、地域資産も豊富で原石が転がっているまちなので、うまく磨いてほしい。

【露木委員】

- ・事業とは、人が育つものであり、楽しくないと続かない。どんな事業でも“人”がキーワードになっている。
- ・雑木囃子は活動を続けていたらファンの方が増えた。人が育つことができる環境をつくることができる、それをまつりにもからめていけたら面白いのではないだろうか。

【大澤委員】

- ・ビジョンの中に“ブランド”という言葉があるが、ブランド力のあるまちを作りたいからブランド(店など)を持ってこればいいという意味ではないことを確認したい。ブランドを持ってこれれば小田原のブランド力が育つ、というわけではない。
- ・ブランド力=社会的影響力(インパクト)であるが、それを文化の目的にしてはいけない。いわゆる、ゆるキャラや一時期だけメディアに出るようなブランドは、ビジョンでいうところのブランドではない。

以上の意見をもって、議題は終了した。

最後に事務局から第2回の懇話会は8月22日(水)に実施する旨を話し、懇話会を閉会した。